

夏の終り

瀬戸内晴美

新潮文庫

E. Miyake

なつ　　おわ
夏　　の　終　り



定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草 144 A

昭和四十一年十一月十日 発行
昭和四十七年十一月三十日 十一刷

著　　者

瀬戸内晴美

発行者

佐藤亮一

発行所

株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)二六〇二一一
振替東京 八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新潮文庫

夏の終り

瀬戸内晴美著



新潮社版

1743

目次

あふれるもの	七
夏の終り	四三
みれん	九一
花冷え	一二九
雉子	一六二

解説 竹西寛子

夏の
の
終
り

あふれるもの

洗面道具をかかえたまま、通りの途中ですばやくあたりを見廻すと、知子^{ともこ}は行きつけの銭湯とは反対の方向の小路へ、いきなり走りこんだ。

住宅の建てこんだせまい道には、表通りよりも濃い闇がよどんでいた。たちまち知子の姿をつみこんでくる。一気に闇の中を小一町も駆けぬけて、ようやく息を入れた。

ビニールの風呂敷でつつんだ洗面器の中には、はじめからタオルで小道具をくるみこんでいて、こんな走り方の時にも、不用意な音をたてないように気が配ってあった。こういう行動をとりはじめてから知子の覚えた小細工だった。

知子をはじめ頃の頃、走る度に洗面器の中で躍りあがり、ぶっつかり合う、石鹸箱やクリームの瓶^{びん}の音に怯^{おそ}えたり苛^{いら}だったりした。湯上りタオルの入れ方ひとつで、その音が難なく防げるのを発見した時、ほっとした思いよりもはるかに激しい惨^{みじ}めさに打ちのめされた瞬間を、知子は今でも忘れてはいない。

知子の下宿に内風呂がないという唯一の不満が、今ごろ、こんなところで役立つようになろうとは、知子自身も考えてもみなかったことであつた。

慎吾の目をかすめ、銭湯へ行くふりをして、涼太^{りやうた}を訪ねるといふ大胆な熱情的な行動をじぶんに強いるものの正体を、知子がみきわめているわけでもなかった。

ある日突然、銭湯へ行く途上で、この道を反対にとり、邸町やしきまちの細い路地を迷路のように走り抜けていけば、意外に速く、一駅離れた涼太の部屋へたどりつくのではないかと思つた瞬間、もう知子の足は止み難い衝動につき動かされ、いきなり横町へ走りこんでしまった。

その路は、頭で描いたよりもはるかに遠い感じで、行けども行けども涼太の部屋に近づかなかつた。それでいて、実際にかかつた時間は、知子が目算したよりもはるかに短かつた。

涼太の下宿が行手に見え、涼太の部屋に燈がついているのを見た瞬間、知子のかえって狼狽ろうばいした。こういう訪ね方が涼太にどんな衝撃と感動を与えるか、想像しないでもわかつていた。引きかえすなら今だと、知子のはつきり考へた。そのくせ脚は、そこからいっそう速度を増し、一気に涼太の部屋の燈にたぐりよせられていった。

案の定、涼太はふいにドアの中にすべりこんで来た知子を見て、幽霊を見るような目つきをした。次の瞬間、事態をのみこむと口も利かず、震えながら、いきなり知子の肩をわし掴つかみにした。「こんなことして……こんな……」

顔を離すと、うわごとのようにつぶやき、なおいっそう激しく唇をふさぎにきた。

たいそう長い時間そこにそうしていたように思つたけれど、実際には五分とたつていなかった。

知子はろくに口もきかず、あわただしく入口のガス台で湯をわかすと、流し兼用の洗面台で、じゃぶじゃぶ顔を洗つた。タオルをしぼり、涼太に背をむけて着物の裾をひろげ、手早く脚をふきあげた。ためらいのない、きびきびした動作だった。ふと、涼太の目に、馴なれているようにさ

え見えるほど手ぎわがよかった。

「さあ、帰らなきゃあ」

知子は今は時間だけを気にしている真剣な顔つきになり、洗面道具をかかえこんだ。本当に一風呂浴びたような、上気した清潔な顔をしていた。目が強く輝いていた。

涼太が立ちかかると、

「いいの、いいのよ。走ってくんだから」

と激しくおしとどめた。この上、家の近くまで、涼太に送らせる不貞さが、慎吾に対してあんまりだという矛盾した考えに、知子が今、とりつかれているのが、涼太にもわかった。

人より短い知子の風呂の時間が、人並になった程度のことと、そんな知子の危険な行動は、慎吾に気づかれていたふうもなかった。

涼太は、それまでにしてやってくる知子の一途な行動を、何より確かな愛の証あかしだと受取った。

思った通りの結果になったのを、知子はどうしようもないと思いながら、涼太の単純なひとりぎめが心の底では腹立たしく、苛々していた。涼太にそれを告げられないままに、知子は慎吾といる時、前にもまして優しさと愛にあふれていた。涼太とどんな激しい密会を重ねていても、知子は慎吾への愛が一向に薄らがない自分を感じていた。けれども、涼太との事が、慎吾に発覚する瞬間を想像すると、血の凍るような恐怖が全身に流れる。

考えてみれば、もしも知子の裏切りが慎吾に発覚したところで、妻に不貞をされた世間の夫の

ように、慎吾が真向から怒れるわけの間柄でもないのだった。

慎吾と知子は、もう八年という茫々とした歳月の波をのりこえてきたけれども、慎吾にははじめから妻子があつたし、知子と結婚しようとは一度も語りあつたわけでもなかった。二人の歳月のどのあたりから、その様な型に決つたのか、もうお互いたしかな覚えも薄れてしまったほど、いつとはなしに、慎吾は妻と知子の間をほとんど等分に往復して暮すようになっていた。

知子は機嫌のいい時、わざと、

「あたしは情婦ですからね」

などといった。その度、慎吾のみせる気弱そうな当惑顔をからかつて面白がる。慎吾が妻と別れようかと一度も云い出さないのは、虫が好すぎるとしても、慎吾にそれを云いださせないでもよい感じを、知子自身が与えていたともいえる。

知子も本気で、慎吾の家庭を破壊してまで、慎吾の妻としての立場を望んだことは一度もなかった。

染色の仕事で、いつのまにか売れない小説家の慎吾よりは、経済能力の出来てきた知子は、なおさら、慎吾の妻にも世間にも悪びれず大っぴらな態度で、慎吾の愛人としての立場に気負っていた。誇示してきたところさえあった。

仕事を持っている知子は、慎吾が妻の許に帰っている時間さえ、あるいは好都合と考えていたのかもしれない。少くとも、知子の立場のような女たちがその時感じる筈の、物狂おしい嫉妬にさいなまれた記憶も、ほとんどなかった。

「慎はいつまであたしにこんなままでいさせるつもり？」

ごく稀に、知子がいかにもびっくりしたように、慎吾に問いただすこともないではなかった。

それは慎吾の無責任さやずるさを責めるといふよりも、じぶんのルーズさに、突然気がついた時の、愕おどろきがこめられていた。

世間の道徳の枠からはみだした場所で、慎吾の妻の存在と、その心の奥にさえ、目をそむけていれば、そんな不自然な生活のあり方が、一向に苦痛にならなかったし、何時いつまでも、たとえば三人のうちの誰かが死ぬ日まで、事もなくつづきそうな気配でさえあった。

互いの狎なれあいの上で平衡の保たれたこの奇妙な関係の中に、突然涼太が侵入してきた日のことを、知子は思いだす。

外出から帰った知子をいつものように玄関まで出迎えた慎吾が、知子がおしつけてくる荷物を胸に抱きとりながら、その日、さりげない声でいった。

「来たよ、今日」

「え？　誰が」

慎吾の目の中にかすかだが押えた笑いがただよっているのをみとめ、知子は首をかしげた。

「誰が来て？」

慎吾に涼太の姓を告げられても、知子は一瞬、動きのない表情でぼんやり突っ立っていた。木下というありふれた姓はどこにでもあった。それに、知子はもうその姓を、通りすがりのパン屋や洗濯屋の看板に認めても、昔のように、反射的に涼太の倅おもかけと結びつき電氣にふれたように心の

芯^{しん}が痛むあの作用を、とうに失っていた。

涼太と最後に別れてからすでに十二年あまりもの歳月が流れていたのだ。

「木下涼太だよ」

慎吾がいつもよりいっそう優しい口調でいった。

慎吾の声を聞いても、やはり動きのない、ぼんやりした表情を変えなかった。驚きとも困惑ともちがう、一種の虚脱感がその時知子を襲っていた。「時」が一瞬、白い川のような形のある幻影をもって、知子の頭の中を素速く流れ走っていった。

「仕事で近所まで来たから、ちょっと寄ってみたといっていた」

「……………」

「上って待ちなさいと何度もいったけど、また来ますって、帰っていったよ」

「……………どんな感じだった」

「おとなしそうな男だ。名乗られる前に、何となくすぐわかったよ」

日頃の慎吾にしては口数が多かった。

八年の間に、いつのまにか知子はじぶんの過去のすべてを慎吾にあげ渡していた。その中には、別れた夫のことも、その別れの原因になった涼太のことも含まれていた。慎吾はいつの場合も、決してじぶんから知子の打ちあけ話や告白を、うながすようなことはしない。

最初のころは、見栄や気どりもあって、話のあちこちを小さな嘘で粉飾して、適当にごまかし

たりぼかしたりしておいた打ちあけ話を、お人好しの知子は、結局、じぶんから前の話と辻まの合わないのも忘れて、いつとはなしに正味の過去を一つずつ慎吾に手渡していた。そうする度、知子の軀からだから、旧い垢あかが鱗うろこをちらすように落ちていくすがすがしさが残る。そう感じた頃には、もう知子は、慎吾の前に、透明な硝子細工ガラスの単細胞のような単純さで立っていた。

知子との恋愛に破れた後、南の島で結婚していた涼太が、その結婚も不首尾に終って、半年程前から上京しているらしいという噂は、知子の耳にも入っていた。それが聞えてきた時も、知子はすぐ慎吾に、

「木下さんが上京してるんですって」

全く世間の噂話をする軽い口調に、一種の好奇心をからませて話していた。過去の男たちのことをさんづけで呼ぶのは知子の癖で、そんな時、知子の表情は、慎吾の目にも何の翳かげもなくけろりとしたものに映った。

知子は軽く眉を寄せると、

「困ったものねえ、あの年になって今更東京で一からやり始めようなんて、どだい無理よ。むこうにいればいいのになあ」

と、じれったそうにいった。遠い身内の不始末を非難しているような、無責任な冷淡さと、昵じつ懇こんさがその口調にあった。

それっきり、知子は慎吾に涼太の話を持ちださなかった。実際、知子は上京した涼太のことを全く忘れていた。互いの生涯の運命を狂わせてしまうような無法な激しい恋の苦渋や甘美さの想

い出も、十二年の歳月の生活の荒々しさが、押し流していて、干上った灰色の河床のような虚しさだけしか、今は知子の胸に残っていない。

じぶんの心から推して、涼太の方はもっとじぶんとの想い出に対して冷淡だろうと考えていた。別れの傷は知子より涼太の方に深く刻まれている筈だ。

その涼太が向うから訪ねてきたことは、知子になつかしさよりも、軽い鬱陶^{うつとう}しさを、とっさに感じさせた。

それは平穩な結婚生活の途上で、ふいに、昔の不用意な恋の相手の影をみて妻の感じる性質のものだった。知子はもしこの問題が複雑になりかけたところで、慎吾がうまくさばいてくれるだろうという、まかせきった安心感と甘えがあった。それもまた、日頃は、寛容な夫に威張らせておいてもらっている妻が、かんじんのところは、たちまち夫の袖のかげに逃げこむ態度と共通のものであった。

慎吾がとにかく、じぶんの昔の恋の相手に、第一印象で好意を感じたらしいのに、知子はわけもなくほっとしていた。

涼太が慎吾に出迎えられて、愕きもせず、悪びれもしなかったと聞いて、知子は涼太がじぶんたちの生活のあり方を、すでに聞き識^しっているのだらうと察した。涼太に対してそのことで後ろめたさも恥ずかしさもなかった。

知子の心のあり方は、一分のすきもない慎吾の妻の心境であった。慎吾の妻が八年間、知子を無視することで辛うじてプライドを保っているのだとすれば、知子の方でも、それと同じことが